

中世における武家の「軍神」信仰

樋口 誠太郎

一、はじめに

中世武家社会のことについて記されたものを見ると武士が「神・仏」を軍神（いくさの守り神）として、一門・一族を挙げて平素から崇拜している事例が沢山ある。では、それは具体的にどのようなものであったのであろうか。

軍神（いくさの守り神）といえば、「八幡大菩薩」が知られている。これは「男山八幡宮」とか「宇佐八幡宮」を戦勝祈願の対象とするものでその例が合戦記などに見られるが、これは武家の一般的な祈願対象であるといってもよいであろう。またこうした神々は厳密に言うところ「ボサツ」であるから「仏」であるはずであるが、これも中世の神仏混淆の信仰形態から独特の風習となって表現されており、

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

またその靈験も説話集や史学文学、絵巻物などとなって伝えられている。

本稿では、足利氏の「勝軍地藏」信仰と千葉氏の「妙見菩薩」信仰を事例としてとりあげて、中世武家社会の「軍神」信仰について探究してみた。

足利氏は源氏一門中の雄であり後に室町幕府を設立する。一方千葉氏は坂東平氏の中の名門で、下総国一帯と上総国の一部に勢力を拡げ、千葉常胤の時代に源頼朝の源氏再興、鎌倉幕府設置をたすけ、その一族は後に源頼朝の奥州征伐などを機に、東北地方各地に、又は元寇の役で九州に千葉姓を伝えて、現代に至っている。

こうした武門に於て「軍神」として「仏菩薩」が戦勝祈願や一族繁栄の対象として信仰されるようになるのは、多くの場合戦場に於て味方が危機に陥った際、どこからともなく示現し給ひ「矢取」の

靈験を示し味方を勝利に導いたり、武將の夢の中に現われて不思議を行う暗示をしたりすることからである。

以下、このようなことを含んで、足利・千葉両家に於て「軍神」がどのように定まり信仰されていたかを述べてみたい。無論「軍神」として崇敬されたものはこれだけではなく「八幡大菩薩」などもあるが、今回はこの二例を中心にとりあげた。

二、足利將軍家の勝軍地藏信仰

勝軍地藏信仰が文献に見られるのは、『漢文清水寺縁起』の中に「同十（延徳）七年七月二日、延鎮与大將軍同心合力、更復造伽藍、安置本尊

命婦所造像也、

為征夷所造地藏菩薩像、名之勝軍、同所造毗沙門天王像、

名之勝敵、以地藏安本尊宝帳之西脇、以多門安同宝帳東脇（下略）

とありこの要旨は清水寺延鎮が、坂上田村麿の蝦夷征伐の勝利を祈願する為めに、清水寺の本尊十一面觀世音菩薩の脇侍として、勝軍地藏と勝敵毗沙門像を安置したところその靈験は大変あらたかであった。このことは、後に東福寺海藏院の虎関師鍊の『元亨釈書』の延鎮の項に「（前略）官軍矢尽、于時小比丘及小男子捨矢与將軍（下略）」^①とあり坂上田村麿の蝦夷征伐のときにおこった不思議として記している。これは戦闘の場に於ける「矢取り地藏説話」と同類のものと思われる。しかしこうした説話をそのまま坂上田村麿の時

代まで溯及させることはできない。おそらく後世の人びとが信仰による「現世の利益」の根拠としてつくりあげたと考える。

また中世後半期の戦国武將が信仰した勝軍地藏は山城国愛宕護山朝日峯白雲寺の本地仏で、これは百済の日羅の靈であるとか役小角とか雲遍上人に附会されていた。^②この愛宕の本地仏である勝軍地藏に関する信仰は、室町時代以降のことで中国地方の相良氏、九州の島津氏の信仰は良く知られている。なお中央でも將軍足利家が天下静謐を勝軍地藏に祈願させた例は当時の文書にもよくみられる。一例をあげると二代將軍足利義詮の次のような文書がある。

史料一

天下静謐祈禱事、勸修勝軍地藏法、殊可被致精誠之状如件

（足利義詮）
左馬頭（花挿）

貞和六年二月廿一日

実相寺僧都御房

この文書によると「勝軍地藏法」という天下静謐のための呪法祈禱がありそれを実相寺に命じて行なわせている。これは「勝軍地藏」が単なる戦闘に勝利をおさめるための「軍神」としての対象からもつと政治的意味をもった足利將軍家の「守護神」的存在になったということとこの後特定の寺社のみではなく「勝軍地藏」を安置する

寺院がふえていったことを意味しているであろう。

その契機はなんといっても室町幕府の創設者である足利尊氏であろう。彼は信仰心のあつい人物で自己の罪業消滅を願ってか勝軍地蔵を信仰したようである。鎌倉の浄妙寺所蔵の尊氏自筆の地蔵菩薩像（この場合は勝軍地蔵ではない。）を見ると、これは貞和五年に尊氏が乾峯土曇のために描いたもので、左側に「夢中有感通、令我畫尊容、利濟偏沙界、善根無所窮」とありそのわきに年号と共に、次のように記されている。「貞和五曆大簇下句為乾峯和尚書之」尊氏（花挿）で、この自贊の最初にある「夢中有感通」というのは、尊氏が九州に敗退していく途中で夢を見たことを指している。この夢の中で敵軍に追いつめられ山頂に逃げのびた処、そこには道がなく断崖絶壁で進退極った時に一人の僧が示現し尊氏の手をとって、そこから飛び下りた処が今まで断崖絶壁であったところが平坦な原野に変わり同時に、そこへ自分の一族や家臣が助けに来たところ目が見えたというもので、この夢は余程その後、尊氏の記憶の中にのこっていた様である。一方では尊氏との交流の中で、武将の間に「勝軍地蔵」の信仰もひろまっていたというのは前記のとおりである。

また足利將軍の中でも九代の足利義尚は戦勝祈願の対象として「勝軍地蔵」を信仰した。義尚が將軍職に就いたのは、文明五年（一四七三）のことで、世は応仁・文明の大乱の最中で、父の將軍義政の時代から幕府や將軍の權威は、下降線をたどる一方であった。近江

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

国の守護六角（佐々木）高頼はその代表例のようなもので、寺社領を侵したり、幕府近臣の本領を侵略し、被害を受けた人びとが幕府に訴えてくるものが多く足利義尚は、ついに六角征伐を断行することにした。足利義尚は聡明な人物であり、その事績をみると先代將軍足利義政などとは異なり積極的でないわゆる「やる気十分」の青年將軍であった。しかし残念なことは近臣に人を得なかつたことがこの青年將軍の意図が実現しなかつた原因であつたようである。

この青年將軍足利義尚は「勝軍地蔵」がその名のとおりに、これを信仰する者に戦勝をもたらすものであるということに関心を寄せた。折から崇祖足利尊氏造立の等持寺「勝軍地蔵」が応仁の乱で荒れ果ててしまつてゐることを知りこれを修復することを近臣大館政重に命じ、資金千疋を等持寺におくつた。等持寺では修復の工をいそぎ長享元年十月二十七日に修理を完成し翌二八日に、その供養を行つた。⁽⁴⁾ その時の等持寺住持景徐周麟の法語は注目に価するので次に引用した。⁽⁵⁾

史料二

南無過去宝生仏、即現將軍那^(一)一身、^(二)（^(三)）^(四)香氣作雲從願轂、和風郁々遍城

□、

長享元年歲舍丁未九月某日、大壇越征夷大將軍源府君、出官庫財送寺、命工修飾勝軍地蔵尊像、而裁胄加首、劔與旗與、光乃益精明、令視者拜

表1 戦国武将の勝軍地藏信仰の事例

武将名	場所	年代	信仰対象又は勧請先
細川高国	京都東山 勝軍地藏	永正17年～	?
上杉謙信	越後国 愛宕山	天文年間～	山城愛宕將軍地藏
穴山梅雪	駿河	天正年間～	不明
小早川隆景	備中	天正年間～	不明
島津貴久	薩摩	不明	山城愛宕將軍地藏
徳川家康	下総野田	不明	西光院勝軍地藏
相良氏	肥前人吉	応仁年中	山城愛宕勝軍地藏

（森末義彰「勝軍地藏考」美術研究第91号を参考に作成）

手稽首、時方有事於江東、府君自將擊之、於是乎出洛、軍于坂本、遂度湖水・軍于鉤里、諸將不期而会者数万騎、凶徒瓦解、一掃而尽矣、而猶有郡国之不臣服者、皆肉袒乞罪於大將軍麾下、呼不是勝軍菩薩深弘願力之冥加顯応而使然耶足利尊氏謹按、此像之始、元弘・建武之間、仁山大相公、馬上而取天下、心誓願、若開吾運、可必建三寺、然而新造未集之國、無所取材、且以字之从字者為額、等持寺是也（以下略）

この法語によればまず勝軍地藏の姿や形を述べた後にこれは足利尊氏の地藏尊信仰の中のひとつとしてはじまったと記されている。九代將軍足利義尚の時代に合戦に勝利をもたらず地藏として当時の戦国武将間にひろまった。おそらく「戦勝のための呪法」のようなものも存在したかと思われるが正確な史料は存在しないのでここでは省略する。

また当初は足利將軍家の「守護神」のひとつであった勝軍地藏も時代を経て争乱の世の中になると表1、に示したように広く各地の武将に信仰されるようになり、武家の「軍神」（守り神）という存在になっていったようである。表中に見られる上杉謙信など毗沙門天を熱心に信仰した武将で旗印にも毗の字を用いたことで知られているが、更に勝軍地藏も信仰していたことは意外に思われるかも知れないが、本来勝軍地藏と勝敵毗沙門天は一对で十一面觀世音菩薩の脇侍であるので、これは謙信が何でもかまわず信仰したということではない。むしろ後世「歴史小説」などで実際以上に謙信の毗沙門

天信仰が強調されて、それに影響されているのではないか。

また「軍神」としての勝軍地蔵の容相も、足利尊氏の時代までは「僧形」に近いものであまりいかめしいものではなかった。しかし足利義尚の時代以降のものの中には甲冑を帶し弓矢を持つものや騎馬のものまで出てくる。いくさに勝つためには相応のいかめしさを時代が要求し変容したのであろう。

三、千葉氏の妙見信仰

足利氏の「勝軍地蔵」信仰に対比すれば、その規模は見方によっては狭いけれども、房総にくり広げられた信仰で「一菩薩」を軍神として、一族で崇敬し、千葉一族の支配したところや城館趾には必ず「妙見祠」があるというのが特色である。中世の城館趾の調査では「妙見祠」があるから千葉一族の支配したところと判定する場合もあるほどである。

では、このように千葉一族が「妙見菩薩」を一族の「軍神」（守り神）として崇敬するようになったのは、どのような理由からかということは「伝承」を調査する以外はないし大体こういうことはあまり年月日の明確なものはない。千葉一族のことを記したもので比較的信頼されているものは『千学集抄』であり、これは坂東八平氏の筆頭である千葉氏の事蹟とその「守護神」である妙見菩薩との関

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

係とその別当寺たる「金剛授寺」（北斗山尊光院と号する）、現在の千葉神社の行事に関する記録を集めたものであるが度々の火災のため他の記録と共に焼失し現在はその部分的なものが抄本の形で残っているだけであるが現在では千葉氏及び千葉市の由来を知る上では貴重な文献である。⁶⁾

また『千学集抄』をもとにしたと推定される『妙見実録千集記』は成立年代も江戸時代の安永九年以降とみなされるので、参考程度にしか利用できない。この他『千葉伝考記』というものもあるが、これも江戸時代の作でいずれも、千葉氏滅亡以後に書かれたもので検討を加える必要があるであろう。

これらを通覧すると、千葉氏が妙見菩薩を崇敬するようになる契機が「平将門の乱」にあつたことが判る、『千学集抄』の「千葉御家代々の事」に次のように記されている。

史料三

一、桓武天皇の第五の皇子葛原親王一品式部卿宮の御子高見王、無官無位にて失せ給ふ。高見第一の皇子高望親王に十二人の御子おはします。第一には良望親王、第二には国香、第三には良文、第四には良将、第五には良兼、第六には良生、第七には良門、第八には良経、第九には上野守良広、第十には常辰文次郎、第十一には駿河十郎、其の余は女子也。良将は鎮守府将軍将門親王の父也。

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

一、良文は人皇六十代醍醐天皇の御代、奥羽両国を知行して下り給ふ。これによつて良文を陸奥守と申す也。

一、将門平親王は、人皇六十一代朱雀帝の御時、承平元年に謀叛を起せり。陸奥守良文を伴ひて関東上野国に乱れ入り、上野国群馬郡府中花園の村、染谷河といふ所に、折しも水増して吹く風波高かりければたやすく渡すべきようなし、ここに十二、三ばかりの小童出て来て、「此の川渡すべし」と言ふ、良文、将門乃ち「是ほどに水増し波高からんにはいかに」といふ「さらば瀬踏みせんものを」と、真先かけにければ大将初め是を待みに渡しにけり。水は南へと落ちて、馬の太腹隠すにて渡す。国香の大軍は渡しかねて河向ふに控へて戦を始めけり。さて染谷川にて七日七夜の内に合戦三十四度なり味方は七騎に打ちなされ、良文も落馬しけるが心中に祈念しけるは「此のあたりに如何なる神仏三宝在しますや。今の戦ひに力を合わせ給へ。」と其の時羊妙見大菩薩雲中より下りまして矢を給はせ給ひ良文七騎に与へ射させければ、七騎の声は千万騎の声と聞えて敵の上には剣を雨らしければ、敵の大軍皆度を失ひけり。彼の七騎は手も負はず、大敵に切り勝ち給ふ。小童忽ち天に昇らんとせし時、両将は「如何なる神」とぞ伺ひにける「善哉、吾こそは妙見菩薩ぞ。親王の妃汝を孕み給うて三月なる頃、此の若を誕生しなんには妙見大菩薩の氏子に奉らんと祈誓申し給ひし故に染谷河に現る国香の大軍かなはずして蜘蛛の子を散すが如く失せぬ国香は山中にひそみかくれぬ。此後は良文将門の小符（しよし）には月星こそは。」と告げ終りて失せ給ふ。さてこそ九曜を

家紋とせられけれ。

この中には「平将門の乱」のことが記されてはいるが謀叛を起すということをあまり悪いことをしたというような形では書いていないのが意外といえよう。しかも自分の祖先平良文が、その謀叛人に味方をして、謀叛人征伐に來た「敵」を妙見尊の加護により討ち負かしたというのである。『千葉実録』は、将門と良文は敵対関係にあつたと記述している。なお『千葉伝考記』、平良文の事の中に「良兼・良文力を合わせて国香を討ちし時、数度の戦闘に及びけるに、

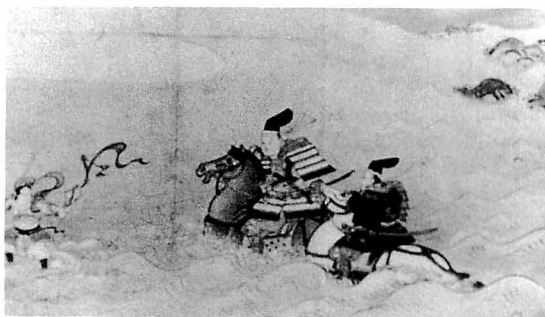


写真1 平良文が妙見尊に助けられた染谷川合戦千葉妙見大縁起絵巻（千葉・栄福寺所蔵）

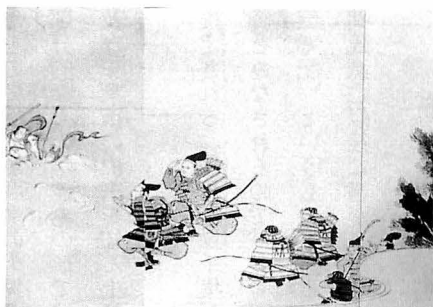


写真2 妙見尊に助けられる良文

良兼・良文の兵戦ひ負けて利を失ふこと度々なり。同年七月(延長九年)

七月挑戦の時、既に廃亡に及ばんとする所に、北斗七星妙見、良兼の麾揃い現はれ、軍を全うして帰る(下略)。

この場合は少し内容が違っている。『妙見実録千集記』は良文と将門が仲間同志であったことを伝えているがいずれの場合に於ても合戦の場に於て味方がどうにもならない敗勢になったときに忽然と示現し「矢取り」の不思議を示して味方を勝利に導くという点は、いずれの「軍神」の場合も同称で「妙見尊」もその例外ではない、その不思議によって、千葉一族が崇敬するようになるのである。

妙見大菩薩は本来「いくさ」の神ではない北斗七星特に北極星をまつる星辰信仰である。北極星が位置を変えないことを不思議に思った昔の人がこの星を崇敬したもので、かなり昔に、アジアの平原に住む人びとの信仰が我が国にも伝わったもので、大阪四天王寺には「七星剣」と名付けられた刀身に北斗七星を刻み込んだものがある。また説話では『日本霊異記』第卅二の「網を用いて漁夫海中の難にあいて妙見菩薩に憑り願ひ、命を全くすることを得る縁。」にみられるように海上安全の「守護神」でもある。海の多い千葉県では、現在でも漁船員に海上で遭難したら、北極星を目印にして真北を目指して泳げと経験者が教えるそうである。日本列島の地形的特色からこうした教訓が生まれるのであろう。まして中世や近世に於ては、北極星こそ海上では唯一の頼りであったと思われる。宗派とし

中世における武家の「軍神」信仰(樋口)

て、妙見尊を崇敬するのは日蓮宗で、これは開祖日蓮が安房国の海辺の漁師の子として生まれたことによるのか、或いは比叡山で学んだことに起因するののか、判っていない。

一方千葉一族が妙見尊を更に、崇敬するようになっていく経過を示すものとしては、前に掲げた記録類の他に、現在の千葉市大宮の栄福寺に所蔵されている『千葉妙見大縁起』という絵巻物がある。

写真1はその部分を引用したものである。このことについては後にくわしくふれる。

千葉氏一族が妙見尊を「軍神」として崇敬した痕跡は、中世以降各地に分散した千葉一族についてみると一層明確になる。

千葉常胤の六男胤頼は本領を下総国香取郡東庄に置き、東氏を名乗った。胤頼は京都仕込みの豊かな教養を身につけ、中央政界の動向にもくわしく、ともすると強いばかりで、文化的センスの乏しい鎌倉武士の中にあつて数少ない文武兼備の武将であつた。その孫の胤行は歌人として知られ、将軍源実朝の側近として、和歌を通じて将軍と親密な間柄であつた。胤行は藤原定家の子為家について和歌を学び為家の娘を妻にしたと言われる。彼は後に出家して素暹と号した。将軍実朝と素暹との間に贈答された和歌は『続拾遺集』に入つていて当中央博物館歴史展示室にも展示されている。彼は承久の変の戦功により下総国香取郡東庄の外に美濃国郡上郡山田庄(岐阜県郡上郡大和町)を加領され晩年にはここに移り住んだといわれて

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

いる。⁷⁾

この岐阜県郡上郡大和町の明建神社（妙見の宛字）にある「妙見大菩薩御縁起」には次のように書かれている。

史料四

美濃国郡上郡栗栖郷 妙見社

妙見大菩薩御縁起

美濃国郡上郡栗栖郷「妙見大菩薩者千葉介平常胤孫」東中務丞胤行従下総国来手当「郡之時所奉勸請也始者在野田」金剱宮之東北胤行暫住野田郷「故也其後築居城ヲ栗栖篠脇山国茲」又奉勸請此所者也。

下総国千葉郡「妙見大菩薩御本尊 附 国家」鎮護之事

抑当寺の本尊妙見大菩薩と申「奉るハ北辰尊星王として衆星の中」の星王神仏の中の「仙菩薩の中大」将広目也広く群生を濟度し「給ふ（下略）」この御縁起を見ると東胤行が美濃国へ移住するとき、東庄より千葉妙見を勸請したことがわかる。そして自分の移住する場所に移しかえている。東氏にとって、千葉一族の「守り神」はそのまま自分の「守り神」であったのであろう。

また、別の例としては、九州千葉氏と妙見社の関係をみてみよう。鎌倉時代後期におこった蒙古襲来は歴史上の大きなできごとであった。九州の平家没官領。肥前国小城郡などを与えられていた千葉氏は、この蒙古襲来に当って、九州へ出陣した。その時の千葉氏の当

主は千葉頼胤で、文永十一年（一二七四）に文永の役がおこり頼胤はこの蒙古との合戦に参加し疵を負い、それがもとで建治元年八月一三日わずか三七才で肥前国小城の地で没した。頼胤の長子宗胤（一二六五〜一二九四）は父の後をうけ小城郡晴気城を本拠にして弘安六年（一二八三）から正応四年（一二九一）まで大隅国の守護として異国警固番役の勤仕についての指揮・裁決に当たっていた。⁸⁾宗胤は下総千葉氏の本宗であるが父の代から特殊な任務に当面して九州へ赴いていたため千葉介のしごとは頼胤の次男で宗胤の弟の胤宗が行っていた。

この間鎌倉幕府が警戒していた三度目の蒙古襲来はなく、永仁三年（一二九四）宗胤も当地で没した。その後情勢は変化し永仁三年北条氏の一門である北条時直が大隅国守護となり、千葉氏の領域は肥前国小城に限定された。宗胤の後は長子胤貞（一二八八〜一三三六）が継いだ。胤貞は千田太郎・大隅守を称し、肥前国小城・下総国千田・八幡両庄内の惣領職や下総国臼井庄などを領有し、下総国中山法華経寺の大壇那として知られ、同寺二世日高の外護者として寺の発展に寄与した。

肥前国小城（佐賀県小城郡小城町）の北浦部落に北浦妙見社がある。この妙見社も千葉氏の守護神として建立されたものである。このことに関しては『元茂公（鍋島）御年譜』によると小城に下向した千葉胤貞が晴気城に住む、牛頭城（千葉城）を取り立て、山上に

祇園社を建て同時に千葉家の守護神妙見社を、北浦に建立した。⁽⁹⁾と
 のことで、城の鬼門に妙見社をまつたと推定される。また松戸市
 在住の松下邦夫氏の調査ではこの外にもいくつか妙見社らしきもの
 がある⁽¹⁰⁾とのである。

このように千葉氏一族は所領の下総国のみではなく、他国へ移つ
 ても妙見尊を勧請している。これだけでも千葉氏一族が「軍神」（守
 り神）としてどれだけ妙見尊を崇敬していたかということが判る。

その崇敬ぶりは中世武家社会の中でも独特のものといつても良い
 であろう。前にも述べたように、千葉氏の妙見尊への崇敬を、その
 はじまりから描いた『千葉妙見大縁起』という絵巻物の存在が注目
 される。中世には大和絵的手法を用いて宗祖の偉業を伝えた祖師絵
 伝や寺社の縁起を伝える縁起絵巻など名品がいくつも存在するが、
 千葉市大宮町栄福寺に伝わる『千葉妙見大縁起』は、宗教絵巻特有
 の崇敬される妙見尊と千葉一族の関係が大変くわしく描かれ、妙見
 社の関連社のこと及び宗教行事などにもふれられ、千葉一族の妙見
 信仰を検討する上で見落すことのできないものである。ただ長年月
 の間に何回も補修が加えられたため原形をそこねた部分も少なくな
 い。

たとえば、その奥書きと描画を比較してみるとその問題点がわか
 る。

史料五

『千葉妙見大縁起』（奥書）

（上巻ノ部）

①下総州葛飾郡千葉北斗山金鋼授寺

妙見大菩薩大縁起門前不出也

本庄 伊豆守 胤村

享祿元年 申子 林鐘廿二日

下総州千葉庄池田郷北斗山金鋼授寺

妙見大縁起分福寿常住四位萬榮

九月吉日

寄進 本庄伊豆守胤村

（略）

天文十九年 名取月廿八日

本庄胤村

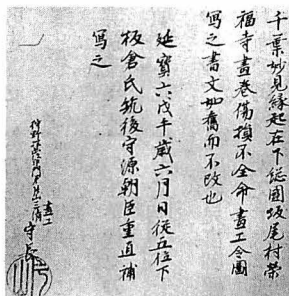


写真4 千葉妙見大縁起奥書部分その2

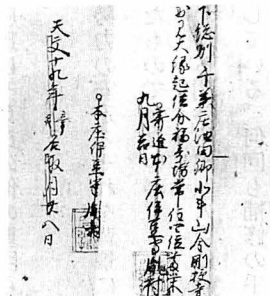


写真3 千葉妙見大縁起奥書部分その1

中世における武家の「軍神」信仰（樋口）

③千葉妙見縁起在下総国坂尾村采

福寺畫巻傷損不全命畫工令図

写之畫文如旧而不改也

延宝六戊午歲六月 日 從五位下
(一六七八)

板倉氏筑後守源朝臣重直

写之

狩野探幽法師門弟片山三清畫工

守長④

①の文の奥書きを見ると約二十年ほどの差があるが、本庄伊豆守胤村という人物がこの絵巻を作製させたことは、まず間違いないさそうである。それは『妙見実録千集記』の中に「本庄系図」がありこれは東庄を支配した東六郎太夫胤頼の二男胤方が祖となっている。また同書中には本庄伊豆守胤村が千葉家当主の御元服儀式などにかかわっていく千葉氏の重臣のひとりであることがわかるので、こうした絵巻を調進する適当なポストにあったといえるからである。

次に、成立年代であるが享禄と天文がある。享禄という年代は千葉氏にとって、猪鼻城を捨て佐倉の将門山に本拠を移し、太田道灌と千葉自胤の連合軍と境根原（現柏市光ヶ丘から酒井根）で合戦し敗れるという最悪の事態を如何に脱却するか試練の時代でありとても絵巻物などを作っているゆとりはなくむしろ天文十九年（一五五

〇）のほうが小田原後北条氏と手を結び、天文七年（一五三八）に国府台で小弓御所足利義明と安房国の豪将里見義堯の連合軍を破り、小弓御所を自害させ里見義堯を安房へ敗走させ、勢力的にも安定しこれも千葉一族の「軍神」妙見尊のお蔭とその利益を強調するには最適の時期かと思われる。また『妙見実録千集記』の千葉代々の当主の記事の中に、千葉第廿八代親胤の項に「此ノ代天文年中、千葉妙見堂再建也。」と記されている。『千学集抄』には「妙見宮御建立は国守平親胤、原式部大輔胤清、住持覚胤の御時、天文十六年戊申三月二十二日絶立。」とあり天文十九年(庚戌)辛亥十一月二十三日御遷宮也・」と記されている。そして本庄氏は千葉氏の他の重臣らと共に重要な役を果たしている。

絵巻物の作製もこうした千葉一族の勢力の安定とそれを背景にした妙見尊の社殿再建と併せて行なわれたものではないか。

この奥書きには更に、この絵巻はいわゆる門外不出く人目にめつたにふれさせないものであることを記している。何回も補修の手が入っていることは、この奥書の写真で一目瞭然である。

次に描画の中で、千葉氏が如何に妙見尊の加護を受けているかを示した戦闘シーンがいくつか描かれている。その中で比較的良く知られているのは写真5で示した千葉常胤が源頼朝の源家再興を助けたとき常胤の孫小太郎成胤は祖父常胤と父胤政出征の留守をまもり、そこへ攻撃しかけて来た千田庄領家判官代親政と合戦になり、兵力

の海」とも言われた利根川下流部の一帯を勢力圏にした海上・粟飯原・国分・などの千葉系支族や常陸大掾氏とこれに関わる一連の武士たちが北条氏とも関係をもっていることがわかる。

また北条氏は勢力が拡大し胤富が本来指示しなければならぬ様なことを千葉氏の家臣団に指示する権限をもつ様にもなっていたようである。次の『原文書』中の二点はその展型的なものであると言えよう。

史料 『千葉県史料・中世篇・県外文書』

北条氏政書状（原文書）

森山^二此度者、然与在城、昼夜油断可^レ有仕置候、森山^二残置人衆之書立、別而遣^レ之候、此外諸法度者、^(佐倉)作倉へ遣候掟書相写、豊前^二可^二指越^一由申理間、万端有^二相談^一肝要^二候、殊八十人之歩弓之内廿人能射者をすくり、早々可^レ被^レ越候、用^二不^レ立者被^レ越候者、無^二所詮^一候、能々糺明可^レ在^レ之候、食物者、作倉^二而役人^二可^レ渡候由申付候、恐々謹言

三月八日 氏政花押

原若狭守殿

史料 『千葉県史料』（同右）

北条氏政書状（原文書）

千葉胤富と小田原後北条氏（樋口）

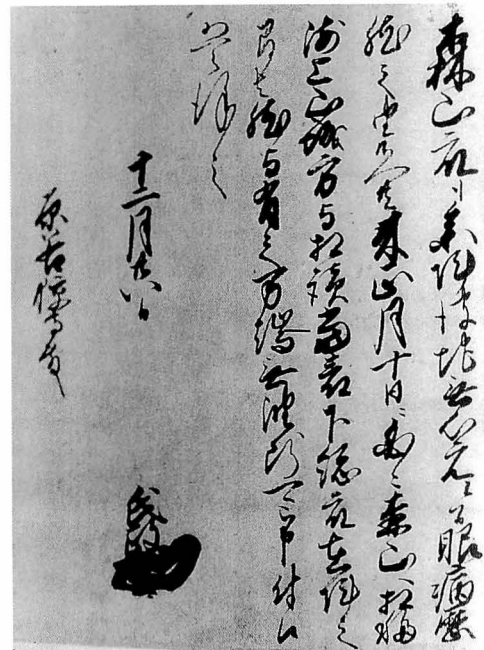


写真1 北条氏政書状 千葉県史料

〈読み下し〉

森山衆も参陣、彼地心元無く候間、眼病歴然の由に候へども来る正月十日必ず必ず森山へ相移り、海上山城方と相談し、当表に下総衆在陣の間は、然とこれ有、万端油断無く申し付くらるべく候。恐々謹言

十二月廿八日 氏政花押

原若狭守殿

表2 千葉氏関係妙見移動表

七星山息災寺	霊亀元年(七一五) 左京職忠明郷の大伽藍建設にかかると 神亀五年(七二八) 行基の創建、現群馬郡国府村大字引間の妙見寺にして、その由緒に神亀年間より寛治七年(一〇九三)まで、寺号を七星山息災寺というところある。	群馬郡国府村引間妙見縁起
七星山息災寺		全 右
平井 邑	承平三年(九三三)十二月二十三日 粟飯原文次郎常時妙見寺より供奉して至る	千 学 集
本庄 藤田郷	良文知行所 承平三年十二月廿七日	全 右
秩父郡大富平の村	良文、常将の知行所	千葉伝考記
鎌倉 村岡	良文の知行所	全 右
上総国 久留里	良文の孫忠常、上総権介に任ぜられ、治安元年(一〇二二)久留里に移転	久留里妙見縁起
上総国仁見(人見)	長元三年(一〇三〇)三月、忠常房州に攻め入る。途中仁見に三日滞在盛しゆかりの地に祀る	千葉盛衰記
上総国 大椎	忠常、上総介に任ぜられ、大椎城を築いて、ここに居城、この時 妙見尊をこの地に移す。	千葉伝考記
下総国 東大友	常長下総権介に任ぜられ、東大友に居城、妙見を此の地に移し祀る	全 右
上総国 大椎	常兼、再び大椎城を取立て、此の城に居城、大椎権介と称す、共に妙見を移す	千葉実録千集記

千葉郷 千葉寺	大治元年(一一二六)二月十日 常重代千葉城に移り、この日、妙見尊を移す	千葉妙見大縁起
猪鼻城	大治元年(一一二六)常重父の命により千葉城に移し、後妙見寺(北斗山)に移す	千葉伝考記
堀之内	千葉庄池田郷堀之内へ移り給うこと、大治元年(一一二六)九月十三日 常重代とりとある	千葉妙見縁起
下総国 寺崎	享徳三年(一四五四)八月十五日 胤直多古にて自害す。千葉城落城、寺崎また破れれば妙見尊を寺崎に置いて敗走す、この時本城に妙見堂その外神社悉く焼失す	妙見実録千集記
千葉郷 妙見寺	大治元年(一一二六)九月十五日 大椎より妙見寺に移す	千葉妙見大縁起
下総国 銚子	妙見寺座主覚実法印、寺崎より妙見寺に移す	妙見実録千集記
小川神社(妙見宮)	千葉城主 千葉越前信胤 奉聞して千葉郷に移す	三笠妙見縁起
奈良 三笠山	建治元年(一二七五)末九月勧請す 天曆(九五〇ころ)朱雀天皇信仰厚く三笠山に勧請す	全 右

に祈り、自分に武勇を与えてほしいと祈願する。本稿では足利氏の「勝軍地蔵」信仰をひとつ例にあげた。「勝軍」という名前が良かったのか戦国時代の武将の中には勧請して、これを信仰するものが多かった。これは当初將軍家という特定のクラスの信仰対象であったものが、將軍との交流を通して各地の武士の間にひろがっていきやがては「民間信仰」の対象になって、あまり「勝軍」くいくさに勝つということとは注目されなくなってしまう。

一方、千葉氏の妙見信仰は、足利家の「勝軍地蔵」信仰よりも古く、千葉一族が一団となって、これを崇敬した。千葉一族が支配した下総国と上総国の一部に二総六妙見が残っている。また本文中にくわしく記したように千葉一族で他国へ移ったもの美濃国の東氏、肥前国小城郡の千葉氏、奥州相馬氏など、皆妙見尊を崇敬している。武家の「軍神」としての勝軍地蔵も妙見菩薩もその縁起や絵巻物で見ると共通して味方が危機におち入った時に示現し、相手の矢を取って味方を勝利に導くという展開になっている。

武家はその伝承を信じ「軍神」としての神仏を崇敬し子孫にそれを伝えていった。これは、中世に於ける武家の信仰を考える上で、重要な一面であると思われる。

本稿をまとめるに当って、千葉氏の部分は千葉市立郷土博物館刊の千葉氏関係資料調査報告書(其の一)『県外千葉氏一族の動向』を参考にさせていただいた。

中世における武家の「軍神」信仰(樋口)

註

- (1) 元亨釈書九、感進四之一 釈延鎮(新訂増補国史大系)
- (2) 洛陽名所集十、(京都叢書)
- (3) 東寺文書
- (4) 鹿苑日録一、等持寺日件長享元年九月晦日・十月廿七日、同廿八日
- (5) 翰林胡蘆文集、三
- (6) 改訂房総叢書第二輯史伝・解説
- (7) 大和村史
- (8) 川添昭二「肥前千葉氏について」(『森克巳博士還暦記念論文集』)
- (9) 『小城郡誌』及『小城町史』
- (10) 千葉市立郷土博物館『県外千葉氏一族の動向』

(千葉県立中央博物館 歴史科)